
私の旦那様！

田中タロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の旦那様！

【Nコード】

N5336I

【作者名】

田中タロウ

【あらすじ】

夫婦の二人は実は教師と生徒の関係！でも、前途多難な予感が・

第1話 新婚生活！

スラッと背の高いイケメン数学教師
セーラー服と若さが眩しい女子高生
そんな二人は、誰にも内緒だけど実は結婚している・・・

そんなハチャメチャストーリーのドラマとか漫画ってたまにあるよね。

現実にそんなことあるわけないのに。

だつてさ。

どうして在学中に結婚する必要があるの？

卒業してからでいいじゃん。

もしくは学校辞めるとかさ。

それとも子供ができたとか？

でもそれならやっぱり学校辞めないといけないよね。

ま、そんなありえない不毛なことに頭を使うのはもったいない。
それよりももっと現実的なことに頭を使おうよ。

例えば・・・

どうやったら教師と生徒の新婚生活をバレないように過ごせるか、とかさ。

「ただいま」

「お帰りなさい、徹。お風呂に入ってご飯にする？」

「うん。今日、何？」

「ハンバーグ」

私がそう答えると、徹はニツコリと微笑んだ。

「ありがとう。ハンバーグなんて手のかかる料理、嬉しいよ。菜緒も忙しいのにごめんね」

「えへへ」

「着替えてシャワー浴びてくるよ」

「うん」

そう言って徹は寝室に入ってしまった。

徹は本当に優しい。

徹の一言一言が心にしみる。

あんな素敵な旦那様、世界中どこを探してもいない。
もう、徹が喜んでくれるなら、なんでもしちゃう！
って感じ！

え？

ノロケすぎ？

いいじゃない、結婚して1ヶ月。

まさに文字通り、湯気が出そうなくらい「新婚ホヤホヤ」なんだから！

浴室からシャワーの音が聞こえてきた。

私は、フライパンの火を気にしつつ、寝室へと急ぐ。

徹が脱いだ服はベッドに置かれていた。

といつても、グチャグチャになつてゐるわけではない。

ちゃんと広げてあつて、徹はいつもお風呂から上がった後、ハンガーにかけてくれる。

でも、今日は私がかけてあげよう。

徹のためなら、私にできることは何でもしてあげたい。

徹のズボンとシャツをハンガーに通して、

壁のフックにかける。

隣には私の服。

仲良く並ぶスーツと制服は、まるで私と徹みたいだ。

事の起こりは、2ヶ月前の4月。

徹のお父さんが倒れ、不治の病だと診断された。

絶対治らない、って訳じゃないけど臓器移植が必要だ。

お父さんの歳を考えても、適合するドナーが現れる確立はゼロに近い。

このままだと余命半年、ということだった。

徹のお父さんは、遅くにできた一人っ子の徹をとてかわいがっていて、

どうしても徹が結婚するところを、そしてそのお嫁さんを見たいと言った。

「こんなプロポーズで申し訳ないんだけどさ・・・俺と結婚してくれない？」

徹は申し訳なさそうに私にそう言った。

「俺には菜緒しかいないから、こんなこと頼めるの菜緒だけなんだ」
照れくさそうに微笑む徹を見て、私は泣きながら「うん」と言った。

私の両親は、さすがに反対するかな、と思ったけど、

「こんな娘、いつまで経っても結婚しないだろうからぜひ貰ってやってください」

と、私はノシをつけて献上されてしまった。

その後、校長先生に事情を話すと、涙もろい彼は、

「そういう事情でしたら、了解しました。
学校側の手続きは、私が責任を持って全て行いましょう」

とポロポロと泣きながら承諾してくれた。
結婚の条件は、学校関係者には誰にも話さないこと、
ただそれだけだった。

本当にありがたい。
嬉しくって私まで泣けた。

こうして、

結婚できる年齢に達していなかった為、誕生日を待って、
翌月の5月に私たちは入籍した。

徹も私も、一緒に暮らすのは卒業までまとうかと思ったけど、
やっぱり結婚したからには一緒に住みたい。
ちょっとリスクはあるけど、
学校から遠く離れたところに安いアパートを借りて新婚生活を始めた。

夏休みには家族だけで式も挙げる予定だ。

「おいしい！菜緒は料理が上手だなあ」
「へへへ、ありがと。ご飯、もう一杯食べる？」
「もううよ」
「はい」

なんだかオママゴトみたい。
何もかもがくすぐったい。

お茶碗を差し出しながら、私は徹を見つめた。

徹は小柄だし、イケメンって訳じゃない。

でも、サラサラとした綺麗な黒髪と温かい瞳、
そして何より、その穏やかで優しい性格で、生徒の間で密かに人気がある。

徹は私の旦那様なんだよー！

って声を大にして言いたい。

でもそこはグツと我慢だ。

大の仲良しの陽子にも言ってるない。

ごめんね、陽子。

いつつも二人で「彼氏ほしー！」とか言ってるけど、

本当は私はもう2年も徹と付き合ってるし、結婚もしちゃったんだ。
いつか、ちゃんと話すからね。

私と徹の出会いは3年前の夏。

そもそもは、家庭教師と生徒という関係だった。
と言っても、夏休み限定の家庭教師だったため、
最初から期間は1ヶ月ちよつとと決まっていた。

だから私は、初対面で徹に惹かれつつも、

歳の差が7つもあるし、

絶対相手にはしてもらえないだろうし、

すぐに別れがくるんだから、

と自分に言い聞かせた。

ところが。

次の4月。

私たちは高校でばったり再会した。

「あ・・・この高校受けたんだ」

「そっちこそ・・・この教師になったんだね」

私たちはなんだかおかしくなって、
体育館の前で笑った。

そんな私たちが恋人の関係になるまでに時間はかからなかった。
そしてあつと言う間に2年が経ち、今はこうして夫婦になった。

食事の後、私たちはすぐに寝室へ向かった。

といつても、ベッドではなく二つならんだ勉強机へ。

もうすぐ期末テストだからその準備をしなくてはいけない。

もちろん、片方は試験作り、もう片方は試験勉強だけだ。

「って、どうして電気消すの？」

「ちよつとだけ、ちよつとだけ」

「ちよつとだけ、じゃないよ・・・勉強しないと」

「こつちだつて試験作らないと」

「じゃあ、電気つけて」

「ちよつとだけ、ちよつとだけ」

「・・・」

結局いつも、机に辿り着くまでにこうして1時間以上かかるけど・・・

ようやく二人とも満足して、眠い目をこすりながら机に向い教科書を開く。

徹は数学の教科書。
私は英語の教科書。

「覗かない！」

「ケチ。ちよつとくらい、試験に出る問題教えてよ」
「絶対ダメ！」

私は机に覆いかぶさった。

「他の生徒に不利になるようなことは、私は絶対しないの！」
「ちえっ」

徹は自分の机に戻ると、数学の教科書を閉じた。

「数学は嫌いだ。日本史から勉強しよつと」

第2話 大キライ！

「坂本先生」

「はい？」

と、笑顔で顔を上げてから・・・
なんだアンタか、とちよつと後悔した。

職員室の自分の机で、急いで次の授業の準備をしているところに、
気に食わない教師から声をかけられたのだ。

「来週の金曜日の飲み会の幹事、僕なんですけど、出欠を取ってて、
坂本先生は参加されますか？」

いえ、結構です。

主人と過ごしますから。

ダメダメダメ。

私は相手が徹であることはもちろん、結婚しているということも秘密にしている。

だから、断るにしても、言い方を選ばないと・・・

「菜緒、参加するわよね？私も行くからさ、一緒に行こうよ」

隣に座っている、国語教師の河野陽子がニコニコと声をかけてくる。
陽子、怖いって。そのわざとらしい笑顔。

いつもはもつと男前なくせに。

まあ、魂胆はわかっている。

仕方ない、あわせておくか。

「そうね。陽子が行くなら行こうかな」

「わかりました。坂本先生も河野先生も参加、と」

そう言つて、ソイツはメモを取った。

ソイツは、ありがとうございました、とそつなく礼を言つと、他の教師のところへいき、同様の質問を繰り返した。

「ちょっと、菜緒。『ソイツ』はないんじゃない？いい人なのに」
「・・・陽子。あんたは『ソイツ』に惚れてるから『いい人』に見えるのよ」

「ち、違うわよ！」

そう言つて陽子は真っ赤になる。

なんてわかりやすい。

「新米教師だから優しくしてあげるのは先輩として当然でしょ！
菜緒はちよつと本城先生に対して冷たすぎよ。大人げないっただらもう・・・」

陽子は逃げるように、職員室を出て行つた。

今年の4月、うちの高校に二人の新米教師がやってきた。

一人は近藤先生という女性の英語教師。

彼女はいい子だ。

明るいいしサッパリしているし気がきくし。

私も陽子もお気に入りだ。

だけど、もう1人が問題だ。

本城先生という男性の数学教師。

「数学教師」ってだけで、イヤなのよね。
だって、徹が数学嫌いだから・・・

って、それはともかく。

この本城先生、とにかく気に食わない。
何が気に食わないって、もう何もかも。

なんで教師になったの!?

って言いたくなるようなイケメン。

背が高くって、スタイルもよくって、もちろん顔は申し分なし。
染めてないだろうけど、生まれつきなのか髪も瞳も茶色っぽく、
肌は白からず黒からず・・・

頭の回転も速く、話も面白い。

それでいて爽やかで嫌味もない。

これで女子生徒に人気がない訳がない。

しかも、女子生徒だけではなく、男子生徒からも大人気だ。

お昼休みには一緒にバスケなんかしちゃって、

その姿がカッコイイ、とますます女子生徒からの人気が高まる。

更に陽子を見れば分かるように、女性教師の間でももちろん大人気。

独身教師だけではなく、既婚の教師まで色目を使う始末。

おいおい。教師が変な問題起こさないでよ。

・・・って私はあまり人のこと言えないけど。

とにかく!本城先生はそんなヤツ。

ダメだ。

苦手すぎる。

私は昔から、いわゆる「完璧王子様タイプ」が大の苦手。いくら嫌味がないヤツでも、嫌味に見えて仕方ない。

いや、わかってる。

本城先生は確かにいい人だ。

優しいし、3年目に入った私でも気がつかないようなことに気づいて、

そつとフォローしてくれたりする。

ホントにいい人。

だけど！

逆に私はそーゆーのがダメなんだって！！！！

私は・・・

そう。

もっと目立たなくって、おっとりしてて、優しくって、穏やかで・・・

・
そんな人が好き。

そう。

まさに、徹は私の理想・・・

「坂本先生」

一人で色ボケをかましていると、当の「私の理想」が目の前に現れた。

「あ、あら。杉崎君。どうしたの？」

もう！ビツクリさせないでよ！

私は回りに気づかれないうちに、徹を睨む。

徹も、私に「何ボケツとしてるの」と目で話してくる。

「河野先生いませんか？」

「陽子？あ、河野先生ね。どっかいつちやったわ」

なんだよ、その適当な返事は！？

と、また徹が目で話す。

まあまあ、私と徹の仲じゃない。

いいでしょ？

陽子は徹がいる3年4組の担任かつ国語教師だ。

一方私は、3年6組の担任かつ英語教師。

英語は4組も見てるけど、担任じゃないのが残念だ。

陽子がうらやましい。

私は今まで一度も徹の担任はおろか、英語教師としても教えたことがなかった。

3年になって、ようやく教えることになったのだ。

初日は、赴任して初めての授業の時より緊張した。

その時はまだ結婚の話も出ておらず、彼氏と彼女だった訳だけど、徹に勉強を教えるのは大学4年の夏以来だ。

案外バカだなー、とか、教えるの下手だなーとか思われたらどうしよう！

生徒の質問に答えられなかったらどうしよう！
と、気が気じゃなかった。

その日の夜、電話で徹に私の授業がどうだったか訊ねると、

「わかりやすくてよかったよ。でも緊張しすぎ。

みんな、なんで坂本先生はあんなに緊張してるんだろ？って言うてたよ」

と、喜んでいいのか嘆いていいのか分からない答えをもらった。

「そうだ。坂本先生にも用事があったんだった。この問題、教えてください」

そう言って、徹が英語のリーダーの教科書を開き、問題を指差す。

「ああ。これね。これは過去完了型で・・・」

と説明しかけて、教科書の端に書いてある小さな文字を見つけた。

『牛乳買つといて。朝、全部飲んじやつた』

ぷっ。

「・・・だから、答えは『yes』よ」

「わかりました。ありがとうございます」

徹はいつものように優しく微笑んだ。

第3話 デート！

週末のデパート。
すごい人出だ。

誰に出くわしてもおかしくない。

私は芸能人並に変装していた。

「・・・芸能人って言うより、仮装大会って感じだよ」

「そう？」

「カツラは必要ないんじゃない？帽子でじゅうぶんだって・・・」

クルクルパーマのカツラに、ハット帽。

ジーパンにウエスタンブーツと普段は着ないようなカッターシャツ。

「怪しすぎ、ってゆーか、暑苦しすぎ？夏休みだよ？」

そういう徹はTシャツにジーパン、キャップを深めにかぶってる。
徹はこういうシンプルな格好が凄く似合ってた。カッコいいのよね、
なんて、見た目にも暑苦しい私は、更に暑苦しさ倍増するようなヘ
ラヘラした表情。

苦笑する徹とデパートの中でエレベーターを待っていた。

170センチくらいの徹だけど、155センチの私にすれば、
見上げる程に大きい。

でも、徹は細いから圧迫感がない。

一方私は、体重48キロと少々圧迫感アリですが。

「受験勉強、大丈夫？」

「うん。ちよつとくらい息抜きしないと」

「でも、期末テストよかったじゃない？あれなら志望校も大丈夫だよ」

「そうかな・・・数学はひどかったよ。夏休み中も学校で勉強するから、

本城先生に見てもらおうかな」

なぬ！？

「どうして本城先生なのよ。あの人、2年生の担任でしょ？3年生の数学見てないじゃない」

「前、たまたま職員室で少しだけ数学教えてもらったんだけど、凄くわかりやすくて。」

また教えてもらいに来ていいですか？って聞いたら、いつでもおいでって言うてくれたんだ。

夏休みも毎日来てるから、遠慮なく来ていいって」

「・・・」

「本城先生っていい人だね。俺、あーゆー先生、大好き」

「・・・私はダイキライ」

「ははは。菜緒って前から本城先生嫌いだね。凄くいい先生だよ？」

「・・・キライだもん」

「例え菜緒が嫌いでも、俺は勉強しないとイケないから本城先生に頼らせてもらうよ。」

浪人はできないしね」

そう言っただけ息をつく。

徹の学費は就職するまで徹のご両親が払うことになっている。

私のお給料じゃそこまでまかなえない。

でも、徹のお父さんも、今は安定しているとはいえ、
いつ急変するかもわからない。

徹は大学はお金のかからない国公立を目指し、できれば奨学金も貰
いたいと考えてる。

私もなるべく生活費を節約し、貯金を作っておかないと。

そんな私たちだから、当然結婚式もごくごくシンプルなものにする
つもりだ。

婚約指輪はもちろん、結婚指輪もなし。

もつとも、二人とも学校に指輪をしていけるはずもないので、
指輪なんてあっても仕方がない。

そりゃ、ちよつとは欲しいけどさ・・・

でも、我慢だ！

今日はそんな我慢の気晴らしに買い物に来た。

高い物は買えないけど、2学期に備えて私の服を見たい。

「そういえば、こないだの教師同士の飲み会どうだったの？

本城先生も来てたんでしょ？」

「来てたどころの騒ぎじゃないわよ。幹事だし、それに・・・」

ああ、イヤだ。

思い出しちゃった。

期末テスト終了後、教師同士で1学期の打ち上げをしたのだけど、

よくもまあ、と思うほど、みんな本城先生に群がる群がる。さすがの本城先生もげんなりした様子で、近藤先生の横に逃げて行った。

同期同士ということもあり、あの二人は仲がいい。いつそ、くつついてしまえ。

そうすれば、年増の女性教員から逃げられるぞ、本城先生。

「ねえ、あの服は？」

「あ！かわいい！派手じゃないかな？」

「あー・・・そうか。教室で見るとどうかな・・・生徒はみんな紺のブレザーだから浮くかも」

「うん・・・でも本当にかわいいなあ」

私は徹が指さした明るい茶色のニットを手にとった。

別に派手じゃない。

普通のオフィスなら地味なくらいだ。

でも教師は服装も難しい。

あんまり野暮ったくても、最近のお洒落な高校生に馬鹿にされるし、お洒落すぎても浮くし。

人によっては、白いスーツなんかでも違和感がなかったりするし。

（もちろん女性ね。白いスーツの男性教師って・・・どうなの）

髪の毛も、染めちゃいけないわけじゃないけど、

生徒に「校則だから染めるな」と言っている手前、教師も染めにくい。

結構色々と、気を使ってるんだからね、先生も。

その点、本城先生は素晴らしい。
髪も染めず、すごく自然体。だけど垢抜けてる。
服装も流行のものだけど、それでいてベーシック。

本当に何から何まで嫌味だ。
ちよつとくらい人間らしく欠点とか弱点とかないの？

結局、さっきの茶色のニットは諦めて、グレーのシンプルなベストを購入。

それから徹の服を少し見て、1階に戻ってきた。

そこはアクセサリー売り場。

キラキラしたかわいいアクセサリー達が目に留まる。

「いいなあ・・・」

「買ったら？」

「・・・うん。でも、いいや」

アクセサリーなんて小さくても結構高い。

それに、今欲しいアクセサリーはない。

指輪以外は。

私は徹と手をつなぎ、デパートを後にした。

第4話 遭遇！

「あ。牛乳がない。ちょっとコンビニ行ってくるね」

「いいよ。明日の朝、俺が飲むのに必要なだけでしょ？」

「違うの。今日の夕食、クリームシチューなんだけど最後に牛乳いれないといけないの」

もうお盆も終わったというのにクリームシチュー。

なんて季節はずれな。

言い訳させてもらうと、春頃に買っていたシチューのルーが冷蔵庫から発掘され、

賞味期限を見ると「8月20日」とのこと。

仕方なく今日はシチューになってしまった。

「じゃあ俺も一緒に行くよ。もう暗いし」

「ありがと！」

実はそう言ってくれるのを期待していた。

だって、普段はあまり二人で外出しないようにしてるし、

一緒に外出するときは人目を気にしないといけないし。

（怪しい変装をするとかね）

しかも、徹は受験生でこの夏休み中も学校で自習していて、

あまり一緒にいられない。

もつとも、生徒が8月いっぱい夏休みでも教師の夏休みはお盆だけ。だから私も毎日学校には行ってるけど、

学校じゃあくまで「先生」と「生徒」だから一緒にいるとはいえない。

夏とは言え、もう7時半で外は暗い。

コンビニまでは歩いて5分だし、そもそもこの辺に学校関係者は住んでいない。

ちよつとくらい二人で手を繋いで歩いてもいいでしょ？

「このお菓子美味しそう！」

「太るよ？」

「・・・やめとく」

「うそ、うそ。買ったら？」

私は徹を恨めしそうに見た。

「そんなこと言われたら買えないよ」

「じゃあ、菜緒の万年ダイエットに協力するために、毎日言い続けるよ」

「・・・言われても食べるもん」

「だから万年ダイエットしてても痩せないんだね」

徹はクスクスと笑う。

でも、私はちゃっかりと新発売のお菓子をカゴに入れ、レジに向かった。

「菜緒、牛乳買った？」

「あ。忘れてた」

「・・・」

なんとかお目当ての物 プラス アルファを購入し、

来たときと同じように手を繋いで、私たちはコンビニの自動ドアを出た。

そして、ソレは急に目の前に現れた。

なに？夢？幻？

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

私と徹はパツと手を離れた。

「・・・・・・・・こんばんは」

最初に口を開いたのは徹だった。

「・・・・・・・・ああ、こんばんは」

次に口を開いたのはソレだった。

私は、たとえば、目の前の状況に頭がついていかず、ただ口をあぐりと開けてるばかり。

徹に脇をつつかれ、ようやく我に帰る。

「お、おつかれさま・・・本城先生」

コンビニでバッタリ会って、
「おつかれさま」も何もないだろう。
でも誰も突っ込んでくれない。

あゝ

「なんでー！？今まであれだけ気をつけてたのに、
なんでこんなしょうもない状況でバレちゃうの！？」
「ねえ」

徹は仕方なさそうに微笑み、
リビングのソファ―に腰を降ろす。

「ねえ、じゃないわよー。どうしよう・・・」
「どうせなら、もっと派手にバレた方がおもしろかったよね。
学校でキスしてるところを見られちゃうとかさ」

学校でキスなんてしたことありませんから。

コンビニで本城先生と遭遇してから（もはや宇宙人扱い）、
私たち3人は、もちろんそれ以上話すような事もなく、
「じゃあ」と言って別れた。

で。

家に帰ってきて冷静になって気がついた。
どうして口止めしなかったんだろう！！！！

私たちは手を繋いでたので、もはや言い逃れはできない。

まさかハチャメチャストーリーのドラマのように結婚しているとは思わないだろうけど、

付き合ってると思われたに違いない。

だったら、せめて口止めしておくべきだった！

「ああ・・・明日、口止めしとかなきゃ。口止め料っていくらかな？」

「本城先生なら大丈夫だよ」

「本城先生だから大丈夫じゃないの！」

そう！

なんでよりによってアノ本城先生なの！？

もうちょっとマシなのに見つかればよかった！！！！

「菜緒、本城先生は言いふらしたりしないよ」

「徹、本城先生の周りには拡声器バリの女がいつも群がってるの。」

一人にでもポロツと話してしまえば終わりよ」

「本城先生はポロツと話したりしないよ」

「信用ならない！！！！」

私は頭を抱えた。

「八方美人の本城先生的ことだから、話のネタが尽きたらポロツと言っちゃうよ、絶対！」

徹が顔をしかめた。

「菜緒・・・どうしても好きになれない人っていうのは確かにいる

けどさ。

本城先生は悪い人じゃないよ。先入観だけでそんな酷く言っちゃダメだよ」

「だって！絶対私たちのこと広まるよ！」

「だから、ちゃんと本城先生に言えば大丈夫だって」

「なんて言うの？私たち結婚してるんですけど内緒にしたいって下さい、って？」

絶対ダメ！それこそ一瞬で広まる！」

「そうなたらそうなたで仕方ないよ」

私は顔を上げ徹を睨んだ。

「徹は！徹は生徒だし未成年だからそんな呑気にしてられるのよ！

私は教師なのよ！？生徒と結婚してるなんてバレたらクビにされる！

校長先生がかばってくれても、保護者や他の教師から『責任取れ』

って言われるのは、目に見えてる！

私がクビになったら収入なくなるんだよ！？徹だって困るでしょ！

？」

普段ならこんなこと絶対言わないのに・・・

言わないようにしてるのに、思わずカッとなって言ってしまった。

言いながら後悔したけど、口を止められず、

一気に最後までしゃべってしまった。

自分でも意識していないところで、

「私が生計を立てている」っていう驕った気持ちもあったのかもしれない。

敏感な徹は、そんなことも分かってしまったのだろう。
凄く悲しそうな顔をした。

でも私も意地になっていて、素直に謝れなかった。

気まずい沈黙の後、徹は立ち上がり静かに言った。

「ちょっと二人とも頭冷やした方がいいね」

そして徹は家を出て行った。

第5話 やっぱり大キライ！

「おはようございます、坂本先生」

「・・・おはよう・・・ございます・・・本城先生」

職員室に入った瞬間、

一番見たくない顔と出くわした。

しかもムカつくことに、

昨日のことなどなかったかのような、普通の笑顔。

昨日、徹は帰ってこなかった。

もう、息ができないほど苦しい。

それに加えて、朝一にムカつくくらい爽やかなこの笑顔。
もっと意味ありげにほくそ笑むとかすればいいのに。

「菜緒ー、何、本城先生を見つめてるの？」

「見つめてない。睨んでたの」

席につくと、すかさず陽子がつっこんでくる。

「睨んでた？どうして？」

「・・・いつものことじゃない」

「それもそうね。でも今日は殺気を感じたよ？」

するどいんだから・・・

夏休み中は当然授業がない。

教師は1学期の片付けや2学期の準備、それに自習しにきている生徒の質問対応などをしている。

そうになると自然、教師はみんな職員室の自分の席にすることが多くなる。

私も本城先生も朝からずっと席にいる。

早く席を立つてよ！

口止めしたいんだから！

すぐにでも本城先生の後をつけられるよう戦闘体勢をとりながら、恋する乙女並の頻度で本城先生の方を盗み見ていると、女子生徒が一人、本城先生のところへ質問に来た。

あれは確か・・・

そうそう、本城先生のクラスの女の子だ。

確か月島さんって言ったかな？

どうして私が2年生の生徒なんかを知っているかというところ・・・まだ2年生にも関わらず、夏休みに自習しにきていることからわかるように、

月島さんは我が校始まって以来の大秀才だ。

うちからの初めてのT大合格を期待されている。

見た目にもまあまあかわいい子なのだけど、勉強ができるせいか、教師に対して愛想がなく、扱いづらい生徒のようだ。

さすがの本城先生もさぞかし手を焼いてることだろう、
と、思ったら！！

月島さんのあの表情・・・
相変わらず愛想はないけど、明らかに本城先生にほだされてる！
そんな目をしている！！

「ほだされてる」・・・なんて古い表現。
って、それどころじゃない。

本城先生。あんな生徒にまで手を出してたのか。
いや、手を出してるわけじゃないか。
でも惚れられるようなことをしているのか。

ああ。

ますます気に食わない。

私は頭を振りつつ、下足室へ向かった。
今日まだ徹を学校で見えていない。
来てないのかな？

こっそりロッカーを見てみると、
中には上履きが入っていた。

来てない・・・

私、避けられてる？

徹は実家に帰ってるんだと思うけど、
ずっと携帯の電源は切られてるし、

実家にかけてようにも勇気が出なくて
確かめようがない。

8月末には結婚式なのに、
こんなことで大丈夫なのかな、私たち・・・

はあ。

本日何度目かのため息をつきながら、
職員室に戻ろうとして、
途中給湯室に寄った。
コーヒーでも飲んでスッキリしよう。

って、

なんでアンタがいるの。

「・・・本城先生」

「あ、おつかれさまです」

「・・・はあ」

思わずまた、ため息が出てしまった。
すると本城先生がクスクスと笑い出した。

「坂本先生、ぼんやりし過ぎですよ。大丈夫ですか？」
「・・・全然大丈夫じゃありません。誰のせいだと思ってるんですか？」

「あれ？僕、何か悪いことしました？」
「コンビニにいました」

「・・・コンビニ行くのって悪いんですね」

「本城先生のお家って、あんなところじゃないですよ？」

「よく知ってますね」

アパート借りるときに、全員の住所をチェックしましたから。

「合コン行く途中に寄ったんです」

「・・・」

正直すぎ。

もうちょっとカッコとかつけないのか。

「あんな遅くに出歩いちゃいけません。良い子は家で寝てください」

「・・・8時前でしたよね、あれ」

「そうでしたっけ？」

ふんつと鼻を鳴らす。

「坂本先生、いいんですか？僕にそんな態度取って」

「・・・」

「頭下げて口止め頼むところじゃありません？」

「!!!!」

こ、こいつ!!!!!!

私が顔を真っ赤にしていると、本城先生は愉快そうに笑った。そして私の方へ一歩近づくと、声を落としてこう言った。

「坂本先生。月島って生徒、知ってますか？」

月島？

さっきの月島さん？

私は頷く。

すると、本城先生はニコツと笑い、

「僕、月島のこと好きなんですよね」

と言った。

「は？」

「あ、付き合ってますんよ？僕の片思いです」

「はあ？」

本城先生は、「じゃあ」と言つと、

何食わぬ顔をして給湯室から出て行った。

第6話 有効期限！

なによ。

これだからムカつくのよね、本城先生は。

——僕、月島のこと好きなんですよね

自分の秘密を簡単に私なんかバラしちゃって・・・

そう。これでおあいこ。

本城先生は私の秘密を知っていて、
私は本城先生の秘密を知っている。

つまりお互い弱味を握り合っていて、
相手の秘密をバラせない。

本城先生はわざと自分をそんな状況に持っていた。

つまり・・・

私の秘密はバラさない、
って言ってくれたも同じ。

なによ、いい人ぶってさ・・・
月島さんのこと好きなくせに、
ちゃっかり合コンとか行ってるし。
まあ、無理に誘われたんだろうけど。

「ムカつくー！」

私はわざと声に出した。

道行く人が数人、驚いた顔をして振り向く。

しかも、何が「僕の片思いです」よ。

月島さんのあの眼差しに気づいてないの？

百戦錬磨に見えて、意外と純情なのね、本城先生って。

・・・まあ、いつか本城先生が月島さんと付き合っようなことになったら、

アドバイスの一つでもしてやるか。

先輩として。

例えば・・・

コンビニには手を繋いでいっっちゃダメ、とかさ。

アパートについて玄関を開けると同時に、鞆の中で携帯が揺れた。

徹だ！

「もしもし！？」

「菜緒？今、大丈夫？」

「大丈夫？じゃないわよ！」

「あ、ごめん。じゃあ後でかけなおすね」

「そっという意味じゃなくて！」

そう言ってる間に涙がポロポロこぼれてきた。

「どうして電源切ってるのよ！酷いじゃない、酷いじゃ……ううん」

「菜緒、泣いてるの？ごめんね」

「……ううん、私こそ……」

「ずっと病院にいたから携帯切ってたんだ」

「病院？」

え？

徹のお父さんに何かあったの！？

「昨日、頭冷やそうと思って、俺と菜緒の分のコーヒー買いに行ってる途中にさ、」

「……なんだ、コーヒー買いに行ってただけだったんだ。」

「母さんから電話がきて、ドナーが見つかったって言うんだ」

「え！？」

「それで俺、菜緒に連絡するのも忘れて慌てて病院に直行しちゃった」

「それで、お父さんは……？」

「うん、すぐに手術に入って、今日の昼前に終わったよ。成功した」

「じゃあ、助かるの！？」

「うん」

顔は見えないけど、電話越しの声から徹の嬉しそうな表情が伺えた。よかった……

私はまた涙が出そうになった。

「それからずっと父さんについてたから、連絡できなかったんだ。ごめんね」

「い、いいよ、そんなこと・・・本当に良かった」

「でね。菜緒に渡したい物があるんだ。」

「本当は昨日渡そうと思ってたんだけど。リビングの棚に入れてある」
「え？」

私は急いで靴を脱ぎ、リビングに向かった。
棚を次々に開ける。

そして、上から3段目の棚に見慣れない封筒が入っていた。

「これ？白い封筒？」

「うん・・・電話切ってから見てね」

心なしか、徹の声が照れくさそうだ。

「・・・やだ。今見ちゃう」

「ダメだつて！」

徹が止めるのも聞かず、携帯を耳と肩に挟んで、封を切った。
中にはメッセージカードが一枚入っていた。

何のカードだろう？

表を見ると、そこには・・・

『結婚指輪 引換券 有効期限 8月18日』

「・・・徹、これ・・・」

「菜緒、指輪欲しそうだったからさ。買ったんだ」

「・・・」

「って言っても俺の小遣いと貯金で買えるくらいの安物だけだね」

カードはぼやけて、みるみるうちに見えなくなった。

「・・・ありがとう」

「うん」

私は涙をぬぐいカードを何回も読み返した。

さっきの言葉以外は何も書いてない。

本当にただの引換券。

でも・・・

指輪そのものより大切に思えた。

「ねえ、徹・・・」

「うん？」

「8月18日って、もう過ぎてるんだけど・・・」

「え？」

私は涙を浮かべたままクスクスと笑った。

「だって今日、8月19日だよ？」

「あ・・・昨日指輪も渡すつもりだったから・・・そういえば今も指輪、持ったまんまだ」

「ふふふ」

抜けてるんだから。
でも、徹らしい。

「ちょっと期限延ばしてもらえる？」

「うん、いいよ。じゃあ8月19日まで延長」

「今日じゃない」

「そうだよ。えっと・・・後5時間で期限切れだね」
「え」

腕時計を見ると午後7時。

ほんとだ！後、5時間で8月19日が終わる！

「中央病院にいるから」

「わかった！すぐ行くね！」

「あ。8時になったら病院に入れなくなるんだった」

「ええ！？1時間しかないじゃない！」

「ははは、頑張ってね」

私は携帯を切ると、

カードを大切に握ったまま駆け出した。

第6話 有効期限！（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

前提が大きな割に、話数が少ない・・・と思いますの方、正解です。

「私の旦那様！」は次の次あたりに連載を開始予定の大型小説の番外編、

というか、布石です。

主人公は・・・そう、あの人です。

よろしければ、そちらの方もよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5336i/>

私の旦那様！

2010年10月11日21時15分発行